

平成 22年 3月 31日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2006～2009 (2007 年度中断)

課題番号：18730422

研究課題名 (和文) 虫をめぐる現代日本の自然観・生命観の発達の研究

研究課題名 (英文) Developmental Study on the Contemporary Japanese View of Nature and Life through Insects

研究代表者 藤崎 亜由子 (FUJISAKI AYUKO)

大阪経済法科大学・教養部・准教授

研究者番号：50411690

研究成果の概要 (和文)：「虫」という身近な自然生命体と人間との交流をもたらす発達の意味を解明するために、虫をめぐる幼児期の子どもたちの認識を調査するとともに、過去 10 年間におよぶ行動データ (幼稚園の場における虫遊びの記録) の分析を行った。さらに大学生を対象とした質問紙調査も実施した。その結果、幼児期の後半にはすでに虫に対する好き嫌い感情に性差が生まれ、女兒の虫離れが進むことなどが示唆された。また、虫をめぐるやりとり分析からは、虫遊びを通しての学びの多様性が示された。さらに、虫に対する言葉かけを分析した結果、ウサギなどの飼育動物は違う虫の独自性が示された。その結果から、虫の目線を通して世界の多様性に気づくことの意味を議論した。

研究成果の概要 (英文)： To clarify the developmental significance of human interaction with insects, which are familiar living things, we surveyed young children's perceptions of insects, analyzed behavior and speech records of children's play with insects over the past ten years, and administrated a questionnaire to university students. First, the findings from the survey indicate that a gender difference in the like/dislike of insects becomes apparent at age 6 and that girls become increasingly averse to insects. Second, the behavior analysis revealed that the types of things learned from playing with insects are varied. Finally, the speech analysis revealed that children's speech when talking to insects is distinctively different from that when talking to domesticated animals, such as rabbits. These results argue for the significance of insects in appreciating the diversity of the world.

交付決定額

(金額単位：千円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1500	0	1500
2007 年度中断	0	0	0
2008 年度	1000	300	1300
2009 年度	700	210	910
総計	3200	510	3710

研究分野：発達心理学

科研費の分科・細目：3902 (人文社会系・社会科学・心理学・教育心理学)

キーワード：人と動物の関係学、生物概念、心の理論、虫、環境教育

1. 研究開始当初の背景

従来、心理学的な観点からは、生物学概念

の発達やアニミズムの問題などが、人の生命理解の問題として議論されてきた(Carey、

1985/1994)。それは、主として人間の「知的認識」に焦点を当てた研究だと言えるだろう。その一方で、バイオフィリア仮説(Biophilia)が生物学者から提言され注目を集め始めていた(Wilson, 1984/1994)。バイオフィリアとは、他の生命に関心を抱く人間の内的傾向であり、生命に対する人間の情緒的な結びつきを進化論的な観点から捉えようとするものである。本研究は、人間の自然生命体に対する知的、情緒的結びつき(嫌悪感なども含む)を包含した形で、自然観・生命観の発達を明らかにすることを目指すものである。そのために虫に注目した。なぜならば、虫という存在は時には人々を魅了し、その虜となる人も多ければ、一方では嫌われ、排除の対象となるなど、よくも悪くも私たちの感情を揺さぶる対象であるからである。

また、「人と虫の関係をめぐる研究」は、自然との関わりが薄れつつある現代において、自然生命体との交流の喪失、もしくはその関係性の質的变化が、人間の育ちにどのような影響をもたらすのかという疑問に答えてゆくためにも必要な研究であろう。身近でありつつ(都市においても、ダニやカ、モンシロチョウ、セミ、アリなどの虫たちがたくましく生態系を築いている)、普段見過ごされがちな虫という存在を人々がどう認識しているのかをさぐることは、私たちの生命に対する感受性を測る指標ともなるものである。

それは子どもたちの教育を考えたときにも同様である。本研究に取り組みはじめたころは、教育の世界でも、失われた機会の回復が模索され、命の教育や食育などの取り組みが始まっていた。それは、あらためて他の生き物との関係の中で人間が生きるこの意味が問われていると考えられる。

以上のような時代の流れの中で、本研究では特に虫という存在に注目して、生命や自然に対する認識や関わりを探ろうと試みた。なぜならば、虫という存在は、好き嫌いにかかわらず、現代都市社会においても関わらざるを得ない野性の生き物だからである。

研究代表者は、本研究の前段階としてペット動物や学校飼育動物およびロボット(擬似生命体)と人間との関わりについて発達心理学の視点から研究を行ってきた。それらの成果を踏まえつつ、本研究では、自然生命体の中でも特に「虫」という実にユニークな存在との交流が人間発達にもたらす意味を明らかにしたいと考えた。

2. 研究の目的

虫に注目した理由は2つあった。1つは虫という存在の文化的地位のユニークさである。古来日本人は、虫を愛でる独特の文化を持っていた。秋鳴く虫や蟬の声に対する思い

入れは極めて日本的な感情である。本研究では、就学前児および大人を対象として、現代を生きる我々の心の中に息づく「虫」という存在に対する感性を探っていきたいと考えた。

2つ目は、生物的存在としての虫のユニークさである。昆虫は人類が生まれる遙か以前、約4億万年前に出現し、人間とは全く異なる論理で地球上に繁栄を極めている。その圧倒的な数、極度に軽量化された精緻な仕組みは、高度に複雑化、知能化を図った人間とは対極的な存在である。また、その小ささは、人間が日常に意識できる最小の生命であるという特徴を持つ。また、虫という存在ほど人間を魅了すると同時に嫌悪感をも抱かせるといふ両義性を色濃く備えている生命体は他にないであろう。このように、ある意味人間とは対極的存在であるからこそ、虫とのつきあいは、私たち人間の自然や生命に対する認識の輪郭をすどく切り取るのに好都合にちがいない。すなわち、ペット動物や審美的な野生動物など、保護し愛情を持って接することが強調される生命体とは異なり、時にはいともたやすく叩き潰される存在であるからこそ、意識的もしくは無意識に人々が抱く生命観や自然観をより包括的に理解する可能性を秘めていると考えた。

研究代表者は2000年から2010年まで、約10年間にわたり幼稚園へ通い、ウサギやモルモットなどの小動物やカエルやザリガニ、虫などに関わる子どもたちの日常の姿を観察しつづけてきた(藤崎, 2004など)。本研究では、多様な動物種との比較の中で、特に「虫」と交流することの発達の意味を明らかにしていくことを目的とした。

その目的がすべて達成されたわけではないが、本研究では、虫に注目するという視点から、異種の生命体と出会うことの発達の意味の解明に寄与するいくつかの知見を得ることができた。その基礎的データをもとにさらなる研究が望まれる。特に、幼児期において虫を通して身近に「死」と出会うことの意味を問い直すことも重要な課題の一つである。

3. 研究の方法

以下の3つのアプローチを行った。

(1) 就学前の子どもたちと虫との関わりをビデオカメラを用いて記録し(幼稚園への訪問調査、1幼稚園での縦断的調査)、バッタやチョウチョ、アリなどの身近な虫への関心のあり方や、虫をめぐる活動(言葉かけや虫遊びなど)を分析する。

(2) 幼児期の子どもたちへのインタビュー調査を行い、虫に対する認識レベルでの理解を探る。

(3) 現代の大人が、原体験として虫との関

わりをどのように自己の中に位置づけているかを、質問紙調査などを用いて明らかにし、その上で、虫を含む自然生命体への興味関心、好き嫌いなどの態度や生物学的知識がどのように育まれてきたのかを探る。

4. 研究成果

まず、本研究では10年にわたって蓄積してきたビデオカメラを用いた録画記録を大容量HDに保存し、解析のためのデータベースを構築した。さらに、質問紙調査では効率的に回答を得るためのWebアンケートシステムの構築を試み、その試験運用を行った。その上で、以下の分析を行った。

(1) 幼稚園での観察記録から

① 虫遊びの分類

子どもたちの虫遊びを観察すると、そこには実に多様な活動が展開されている。小さな虫を契機として、虫を捕る(追いかける、待ち伏せる、計画を立てる、道具を作成する、分配、雌雄の確保、仲間との協力など多様な活動が展開される)、捕った虫でゲームをする、虫イメージを利用した遊び(絵、作品など)、飼育と観察、埋葬、からかいの道具として使用する、贈答品として利用する、虫に対してコミュニケーション活動を行う、虫に関する生物学的・生態学的知識の獲得、虫の命をもてあそぶ活動(殺す・いたぶる)、虫の擬人化など多岐にわたることが示された。

小さな虫という存在を契機として生じる多様な活動の中で、子どもたちは科学的知識としての虫の理解を深めるだけでなく、仲間との交渉術や、死と出会うことによるいのちの学びが生じていることが示された。

このように、誰でもが知っている子どもたちの「虫遊び」について、その諸活動を体系的に示した研究はまずない。本研究を土台としてよりいっそうの研究が望まれる。特に以上のような遊びがどのように発展していくのか、その年齢による違いや、熟達化へのプロセスの解明は今後の重要な課題である。

② 虫に対する幼児のことばかけの分析

幼稚園児を対象として、虫を含む身近な動物(幼稚園で飼育しているウサギ)に対してどのような言葉かけを行っているのかをエピソード的にとりあげて、比較分析した。

ことばかけの分析には、発話の形式から、以下の4段階に分類をおこない(藤崎, 2004)、そのような発話が、それぞれの対象(ウサギ、虫)との間で成立しているか否かを検討した。その結果を以下に示す(Table 1)。

ウサギへの言葉かけの特徴 レベル1: 子どもたちは、ウサギに対して「うさぎさーん」

(女児 5:9) と呼びかけたり、「おいしいよーニンジンよー」(女児 6:1)、「おいで おいでー」(男児 3:10) などと頻繁に言葉をかけ

Table 1. 言葉かけの形式と共感性の深化

レベル1: 言葉をかける

例)「ウサちゃん ごはんあるよ」「おーい」など、対象にコミュニケーション可能性を見いだす。

レベル2: 問いかける

例)「何してるの?」「どこいくの?」など、対象に何らかの意図や情動の働きを見出そうと問われる。

レベル3: 終助詞の「ね」「な」の使用

例)「おいしいね」「よかったな」など、自分と相手との間で情動が共有されていることを前提とした発話

レベル4: 代弁

例)「あーおいしい」「ねむたーい」など、自他の境界が曖昧となり他者の視点からその気持ちを代弁する発話

る。ここからも、ウサギという対象は、子どもたちにとって言葉をかけるべき対象として位置付いていることがわかる。レベル2: 「うさぎちゃーん おいしいかあ?」(男児 4:8)「とりあいっこしてるの?」(男児 4:8)などと問いかける発話が観察された。レベル3: 時には、「おなかすいていたんだね」(女児 5:7)、「こわくないやろ よしよし」(女児 4:11)などと、ウサギの心的状態を推測して共感的に言葉にすることがみられた。レベル4: 頻度は少なく、数回程度しか観察されないものの、餌を取り上げられたウサギを見つ「いや いや いや」と首を振ったり(女児 6:4)、走り回るウサギを見て「おこってますよー おこった」と呟くなどの代弁がみられた(女児 6:1)。

虫への言葉かけの特徴 虫に対してはウサギに対するよりも言葉かけ自体が少なくなるものの、アリにトンボの死骸を指さして「こっちだよー」と教えたり(男児 5:4)、モンシロチョウに「おらーうごくなとまるな!」(5:2)などと叫ぶなど、言葉をかける行為は存在している。しかし、問いかけたり(レベル2)、共感的な言葉かけ(レベル3)は、まず見られない。その一方で、レベル4の代弁が存在する。例えば、飼育槽の中のカブトムシ同士が頭をくっつける様子を見ながら「ちょっとどいてよ」と言ったり(女児 5:2)、虫カゴごと落としてしまったカマキリを拾いつつ「おもしろかったー」とカマキリの台詞を言ったり(男児 6:6)、カブトエビの入った飼育槽を揺らして「大波や〜こわい〜」(男児 5:6)という発話である。レベル2と3をとばして、レベル4の発話が存在することが虫への言葉かけの特徴だといえるだ

ろう。

以上、ウサギと虫に対する子どもたちの言葉かけの特徴を比較した結果、ウサギに対しても虫に対しても子どもたちは言葉をかけるという関わり（レベル1）を日常に行うことが示された。またウサギに対しては、頻度は少ないものの、「おいしいね」などと共感的に言葉をかけ、時として情動を共有化する代弁という形式の言葉かけがみられることが示された。一方で、虫に対しては、問いかけ（レベル2）や共感の助動詞の使用（レベル3）はまず見られない。だが興味深いことに代弁（レベル4）が時として出現する。

虫に対する代弁は、虫の視点に立って、まったく異なる世界を生きる虫たちの世界を楽しむような代弁である。そこにはウサギとの関わりとは異なる虫ならではの不思議さがある。

近年、「ヒトと動物の関係学」への関心の高まりとともにペット動物やウサギなどの飼育動物と子どもたちとのかかわりについてもその意義が改めて認識され、動物介在教育という言葉も生まれている。その一方で、身近な虫たちの存在は忘れられていたといえるだろう。本研究は哺乳類を中心とした飼育動物とは異なる虫ならではの関わりを面白さを示したといえるだろう。つまり、人間とは全く異なる論理で生きている虫だからこそ、その虫の視点を通して、見慣れた世界を新鮮な驚きでもって見つめることができるという良さがあるといえるだろう。それは、脱人間中心主義的な世界観を築いていくきっかけとしても機能している可能性がある。

（2）子どもへのインタビュー調査

①身近な虫の名前の認識度調査

身近な自然生命体に対する就学前の子どもたちの認識を調べる一環として、「虫」を題材として、捕獲したことのある虫の名前と、幼稚園に生息している虫の名前を尋ね、さらにオンブバッタに対する好き嫌いなどを調べた（対象、4,5,6歳児 計153名）。その結果、大きく分けると以下の4点が明らかになった。1)年齢が上がるにつれて身近な虫の名前に関する理解が深まっていく。2)子どもたちが名前を挙げる虫の名前はバッタやチョウが多い。3)男女によって名前が挙がる虫の種類に若干の違いが認められ、男児はバッタ、女児はチョウの名を挙げる子どもたちが多かった。4)年長児では男児に比べて女児では虫（オンブバッタ）を嫌いだと回答する子どもたちが多かった。

以上の結果から、就学前の子どもたちも身近な虫に対する理解を深めるとともに、その関心のあり方には男女差がすでに存在しはじめることが明らかになった。また、子ども

たちの心に残る虫概念の中核には、ダンゴムシやアリなど頻繁に接触する虫ではなく、バッタやチョウという虫が存在していることが示された。このことは原体験として実際に頻繁に出会っている虫と、心に残る原風景の中の虫とはずれがあることを示唆している。

②身近な4種類の動物の好き嫌い度調査

幼児期の子どもたち（4,5,6歳児 計152名）を対象に、身近な動物に対する好き嫌いを調べ、基礎的データを提供した。調査は2種類行った。1つは保育者を対象とした調査であり、保育者に担当するクラスの子どもたちの動物の好き嫌い（幼稚園にいる4種類の動物：ウサギ、カメ、キンギョ、虫に対する好き嫌い）を評価してもらうものであった。2つめは、子どもたちに直接、ウサギと虫に対する好き嫌いを尋ねた。いずれの調査結果でも、年少（4歳児）の子どもたちは動物の種類による好き嫌いの差はほとんどなく、いずれの動物種も好きだと回答する子が多かった。性別によっても違いはみられなかった。一方で年長児（6歳児）では、動物の種類によって好き嫌いの程度に違いがみられるとともに、ウサギは女児に好かれ、虫は男児に好かれるという性別による好みの違いも出てくることが示された。

5～6歳の年長女児では6割が虫を嫌いもしくは苦手とすることが示された（3～4歳女児では6割が虫が好きだと回答）。この結果は、従来言われていた時期（小学校高学年）よりも早く、女児の虫嫌いが進行していることを示している。この結果からも、幼児期における原体験の重要性が示された。

③10種類の虫に対する認識調査

幼稚園の子どもたち（4,5,6歳児 計157名）を対象に、10種類の虫の名前（チョウ、バッタ、コオロギ、ハチ、ダンゴムシ、アリ、カマキリ、セミ、トンボ、テントウムシ）に対する理解と、好き嫌いを調べた。その結果、年齢が上がるにつれて、虫の名前に対する認識度は増加することが確かめられた。

一方で、男女による好き嫌いの差や認識度の違いは見られなかった。これは、「虫」という一般的なイメージではなく、個別に尋ねたことによる効果があるのかも知れない。例えば、毛虫など、比較的好き嫌いが分かれる虫について尋ねた場合には結果が異なる可能性も否定できない。

興味深いのは、身近な虫の存在に気づいていない子どもたちが、少なからず存在することである。同じ年長児でも、アリすら見たことが無いと言う子どもたちが5名（8%）存在していた。また、年少児でも10種類全ての虫を見たことがあると回答した子どもが3名

(10%)存在した。同じ環境で生活しつつも、多様な虫たちの存在によく気づく子どもたちが存在する一方で、全くそのそれに気づかない子どもたちもいるのである。

幼児教育においては、自然と触れ合う環境づくりというと、園庭に草や木を植え、園内の植生を豊かにし、ビオトープなどを整備することがよく試みられる。だが、そのような環境の整備だけでは不十分であり、子どもたちの個人差を考慮した上で、彼らがどう身近な生命体の存在に気づき、豊かに交流しているのか、その有機的なつながりの方法を含めて検討していく必要があるだろう。

(3) 大学生への質問紙調査

①心に残る生きものとの出会い調査

大学生(189名、男子105名、女子84名、平均年齢は19.11歳、SD=1.18)を対象に、これまでの人生において思い出に残る生き物(植物、菌類をのぞく)との出会い(良い、悪いを含む)を3つ回答するように求めた。その結果、現代大学生の思い出に残る生き物との出会いでは、「イヌやネコ」を中心としたペット動物との出会いがその中核を占めていることが示された(男児37%、女児39%)。

男女で比較すると、男子ではイヌの次に「虫」が多くあがっていた(17%)。一方で、女子では、「小型ほ乳類」が多くあがっていた(20%)。 χ^2 検定を行った結果、「小型ほ乳類」「トリ」「ハ虫類・両生類」「虫」で男女による生起頻度の偏りが有意であった($\chi^2(8, 520)=36.56, p<.001$)。「小型ほ乳類」「トリ」は女子学生で多く名前があり、一方で「ハ虫類・両生類」「虫」は男子学生の方が多かった。以上のように、大学生を対象とした調査からも、原体験としての「虫あそび」の頻度に男女差がみられることが示された。

②虫の名前に対する認識調査

大学生(男子105名、平均年齢19.17歳、SD=1.17歳、女子87名、平均年齢18.72歳、SD=0.95歳)を対象に、5分間でできるだけ多く虫の名前を記入するように求めた。その結果、思い出した虫の総数は、男子で平均21.89匹(SD=8.8)(範囲5~43種類)、女子は平均21.89匹(SD=8.17)(範囲6~40種類)であり、男女差はみられなかった。

もっとも多く名前が挙がったのが、カブトムシ、クワガタムシを代表とする甲虫目の虫であった。甲虫目だけで33%をしめる。実際に日常に出会う虫は、アリやカ、ガなどが多いと考えられるが、現代大学生の昆虫概念の中核は大型甲虫であることがわかる。次に多いのが、バッタ目(バッタ、コオロギ、スズムシなどを含む)であった。

興味深いのは、「昆虫以外」の動物の登場

である。そこでは、虫としてクモやムカデ、ダンゴムシ、時にはトカゲやカエルなどの名前があがっていた。日本語の「虫」は、昆虫のみならず「地を這うもの」という意味で、人間、鳥獣、魚貝以外の動物一般を指す場合がある。本研究の結果も現代大学生が幅広い概念で虫イメージを形成していることを示している。

また、大学生はより詳しく種名を記入する傾向はあるものの(例えば、キアゲハ、トノサマバッタなど)、彼らがあげた虫のほとんどは先の幼稚園児を対象とした研究でもあがった名前であった。このことは、彼らが持つ虫概念の中核にある虫への認識は幼児期にほぼ出揃っているといえるだろう。

(4) 子どもへのインタビュー調査および大学生への質問紙調査のまとめ

以上、子どもを対象としたインタビュー調査および大学生を対象とした質問紙調査からは、一貫した結論はでなかったものの、幼児期においてもすでに男女による虫の好嫌感情の分化がみられることが示唆された。これは従来の研究が指摘した児童期よりも以前の段階で男女差が生まれることを示している。本研究では、この要因として、環境要因(文化的要因を含む)と、遺伝的素因、そして都市化の要因の3点から議論をし、今後の調査の方向性を議論した。

文化的要因とは、例えば女性が虫に関心を示すことは変わっている、好ましくないというような考えた方のことであり、このような価値観を共有する文化の中で育つことによって、女兒の虫離れが促進されるという考え方である。保育者志望の学生を対象とした調査(林・田尻, 2005)でも、女性の虫離れは深刻であることが示されている。母親や幼児教育に携わる人々の虫離れが進む環境の中で、女兒の虫離れが発達の早期から受け継がれていくことは十分に考えられる。

ただし、文化的環境による影響のみでは、虫に対する関心度の男女による違いは説明できないだろう。例えば、不安障害の1つである特定の恐怖症・動物型(動物や虫)を持つ人の生物学的第一度親族は、動物恐怖症にかかりやすいことが知られており、さらに男女で比較すると、動物型および自然環境型の恐怖症の75%~90%が女性だという(DSM-IV-TR)。現代人類の心を狩猟採集の生活様式に対する適応の結果だと仮定してその成り立ちを説明する進化心理学者は、クモやヘビが嫌われる理由として(初めて見たヘビを人間やサルは恐がる)、それらが我々の祖先にとって危険なものであったからだと考える(Pinker, 1997/2003)。虫に対する嫌悪感についても、環境や文化の因子だけでなく何ら

かの生物学的（遺伝学的）背景を考慮する必要があるだろう。

ただし、注意しなければならないのは、動物の中でも「虫」に注目した場合、狩猟採集生活の中で食用となる虫の採集に携わってきたのは主に女性である可能性である（野中、2005）。有毒な虫が危険であることは男女で違いは無い。ではなぜ、虫に対する関心の強さが男女で異なるのかについては、今後さらなる検討が必要であろう。

最後に考慮しなければならないのは、都市化という問題である。昆虫の名前の定着度を1980年と2004年で比較した久保田・阿部（2004）の調査では、20種中16種で正解率は低下し、全体では10%以上も正解率の低下が見られたという。確かに私たちの虫への関心は年々減少傾向にあるようである。Berenbaum, M. R. (1995/1998)は、虫嫌いの感情をプライバシーの領域に侵入してくるものに対する嫌悪感情と関連付けて説明を試みている。都市化とは人間の脳が生み出したもの以外を排除する（養老、1989）。加速する都市化の中で、関心が薄れ意識の外に追いやられた虫がなお住環境に侵入してくる姿に、人はより強く嫌悪感を抱くようになっていくのかもしれない。

以上を総合すると、男女による虫に対する関心の違いについても、都市化による虫との関係の質的・量的変化という問題を考慮する必要があるのではないだろうか。現代では、かつて存在した虫との有機的で多様な関わりが失われつつある。例えば、野中（2005）は狩猟採集生活を送るグイ・ガナ=ブッシュマンの虫利用を調べた結果、食物として利用するだけでなく、狩猟道具の材料や薬品、日常生活用品、美容、装飾、遊びの素材というように人間生活全般にわたることを示している。女性もカマキリの卵を首飾りにしたり、カメムシの体液を肌の手入れに使ったり、ハンミョウをお化粧遊びの素材に使用しているという。一方で、現在の子どもたちは虫とどのように関わっているのだろうか。

本研究では、幼稚園児の虫遊びは主に捕獲・実験・飼育という活動が中心に行われていることが示された。ままごとの素材として虫が使用されることもあるが（藤崎・麻生、2005）、まれである。獲物として虫を捕まえたり、飼育して観察したり、分類したり、実験したりという関わり方は、どちらかというとなりが好む傾向のある遊びである。都市化が進む中で、日常生活における虫との多種多様な関わりが失われた結果として、女兒の虫離れが進んでいる可能性もないだろうか。

以上のような点を考慮しながら今後も虫遊びの実態と解明と、虫に対する認識双方を調べていくことが必要であろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

- ① 藤崎亜由子. 2009.3 身近な動物に対する幼児の好嫌感情の発達. 大阪経済法科大学論集, 97, 25-57. 査読無
- ② 藤崎亜由子. 2007 幼児の昆虫観：身近な虫の名前に対する認識調査から大阪経済法科大学. 総合科学研究所年報. 第 26 号, pp109-127. 査読無
- ③ 藤崎亜由子. 2006 「人と虫の関係」をめぐる研究の現在と展望. 大阪経済法科大学. 総合科学研究所年報第 25 号, pp3-14. 査読無

〔学会発表〕（計 6 件）

- ① 藤崎亜由子・麻生 武. 2010. (印刷中). 幼児における動物へのことばかけと共感性の深化. 日本心理学会第 74 回大会.
- ② 藤崎亜由子. 2009. 11. 20. 虫をめぐる現代日本の生命観. HSN ネット. 公開講座フェスタ. 於：さいかくホール
- ③ 藤崎亜由子・麻生 武. 2009. 6. 14. 関わりの中で生まれるロボットの心. 2009 年度科学基礎論学会総会. ワークショップ. 話題提供. 於：大阪府立大学.
- ④ 藤崎亜由子. 2009. 9. 20. 虫の名前に対する大学生の理解. 日本教育心理学会第 51 回総会, PA019. 於：静岡大学
- ⑤ 藤崎亜由子. 2009. 8. 26. 心に残る生きものの風景：大学生への質問紙調査から. 日本心理学会第 73 回大会, 1120. 於：立命館大学
- ⑥ 藤崎亜由子. 2006. 5. 20. 身近な動物に対する幼児の好き嫌いの発達日本保育学会第 59 回大会, 780-781, 於：札幌大谷短期大学

〔図書〕（計 1 件）

- ① 藤崎亜由子. (印刷中). 動物の「心」を理解する心の発達. ヒューマン・アニマル・ボンド（仮称）. 北大路書房.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤崎 亜由子 (FUJISAKI AYUKO)
大阪経済法科大学・教養部・准教授
研究者番号：50411690

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし